

ことばⅡ洋服説と校正

田中久紀子

「ことばは洋服のようなものだ。ただしオーダーメイドはできなくて、既製品で何とか間に合わせなくてはならない」。国文科の学生時代に教授から聞いたこの一言を、校正の仕事をしなから思い出すことがよくある。

確かに、自分の言いたいことにびったりしたことばを探す作業は、筆筒の中を引っかきまわしてその日の天候や気分に合った服を探すのに似ている。なかなかこれだというのが見つからなくて困るときもある。組み合わせを工夫してみたり、辞書を引いて

手持ちを増やすことを試みたりするところも、スカート一枚あしらって雰囲気を変えてみようか、それともデパートで新しい服を探そうかと悩むのに似ている。ただし、まったくの新造語を独りよがりには詠えるわけにはいかないのが、服と違って「オーダーメイド不可」というゆえんである。なぜ不可かと言うと、何の拠り所もない新造語では「通じない」ので、ことばとしての用をなさないからである。いわゆる新語であっても、まったくの根無し草ということはない（音声の与える印象など、何らかの共通理解が必要である。また「無意味」という共通理解もありうる）。

また、何をどう着ようと個人の自由であるように、ある事柄をどんなことばで表現しても構わないというところも共通している。自由ではあるが、服は自らが着るものであると同時に、他者から見られるものでもある。いくら自分ではびったりしていると思っても、傍から見ると着方がおかしいことや、場に

そぐわないことがあるだろう。ことばも同様に、覚え違いをしていたり、遣い方を誤ったりして、うまく意図が伝わらなかつたり、思わぬ誤解を招いたりすることがある。

ことばと洋服、意外な取り合わせのようだが、このように比較してみると、「自己表現」性と「公共」性ということばの本質が浮かび上がってくるように思う。本づくりにおける校正という、おもにことばを扱う仕事に、この二つの性質はどのように関わってくるだろうか。

よく言われるように校正の大原則は「原稿どおり」である。これはつまり著者の「自己表現」性第一ということであろう。校正者はいわば鏡となつて、ポタンがずれてかかっているか、ネクタイが曲がっていないかなどを映して見せる。具体的には、事実関係や字句の誤り、表現のおかしな所を「……でOKですか？」などと鉛筆書きの疑問として指摘し、その取捨は著者と担当編集者に委ねる。自分のフアッションセンスに問題がある場合（思い違い、語感の問題など）もあるので、複数の辞書に当たつてから疑問にする。しかし、「セーターの下からシャツがはみ出ますよ」と指摘しても、著者はそれが今風の着こなしだと思つているということもあるし、「葬儀に出席するのに深紅のドレスでは誤解されませんか？」とこちらは心配でも、その服装がもつともよく弔意を表わすと著者が考えるだけの事情が存在することもある。一応指摘したうえで、「これで著者の意図どおり。OKです」となれば、首をひねりつつ

も、校正者としてはそれ以上どうしようもない。「何をどう着ようと個人の自由」である。結果赤いドレスが颯爽を買つても、それは著者に引き受けていただくしかない。

このように「自己表現」性の面だけから見ると、著者は書きたいように書けばよい、間違つていようが誤解されようが、それは著者が責任をとればよいのだという考え方、ひいてはデータ入稿が主流となつた昨今、校正者不要論も出てくるだろう。しかし本づくりにおけることばの「公共」性が他の局面におけるよりも高いことを考慮すれば、やはり鏡としての校正者の存在は欠かせないだろう（編集者がチェックすればよい、という意見もあるだろうが、私見では編集者はどちらかという発信側で、著者と近い立場だと思う）。

本づくりとはすなわち、著者のことばをそれだけ切り離して、複製し、流通させるということである。写真集や画集などの例外もあり、多少図表などが入っていることもあるが、一般に本の内容は、おおむねことばそのものによつて成り立っている。対面状況で行なわれる会話のように、身振りや声の調子などの表現手段を併用することが本づくりではできないから、ことばだけで言いたいことを十全に表現しなければならぬ。また、たくさん部数作つて売られるという量の面での「公共」性もある。出発点では著者の自己表現でも、それが編集者、校正者、印刷所、製本所、書店……と、さまざまな人の手と目を経て、「公」のものとなつていく、出版とはそのような営みであろう。

本づくりの過程では、受け身に徹しなければならぬ校正者だが、実は「公共」性という、ことばの重要な一面に関わり、出版という仕事の本質の一部を担っているのではないだろうか。